

書 評 と 紹 介

五十嵐 仁著

『戦後政治の実像』

——舞台裏で何が決められたか——

評者：中馬 清福

1

政治部に属したことのある新聞記者なら、だれもが三つや四つの秘話を持っている。試みに「政治記者OB会報」とか「政談春秋」などのどの号でもいい、めくって見られるがよい。ここでは毎号、日本の政治や政治家にかかわる秘話やエピソードが、老記者たちによって次から次へと語り継がれている。政治裏面の発掘作業と塗り替え作業は、きょうも静かに進行中である。

新聞記者や政界関係者による体験談の秘話物や懐古談物、それに最近では検証物というのだそうだが、その手の書籍はいまや文字どおり汗牛充棟で、とても読みきれものではない。いや、正直に言うと玉石混交、読むに値しない本はまだいいほうで、手にするとかえって判断を狂わせるたぐいのものまである。

第一、どの世界でもそうだが、真に知る者はなかなか語らない。まして権謀術数が日常茶飯事の政界である。記者や政治家の秘書たちは、自分が見聞した事実を正確に記しているにしても、それはあくまで部分的、限定的なものであ

る。なによりも立体的で重層的な視点と分析が求められる政治の世界においては、事実がすべて真実だとは限らないから厄介だ。記者たちに対する当の政治家の言動が、どういう状況のもとで、どういう時点で、だれを意識してなされたものか。加えて、記者や政治家の秘書たちが「秘話」を公開した時期はいつで、その意図は何か。それらを冷静に判断したうえでないと、そのまま政治分析の材料とするわけにはいかない。裏面史的な秘話やエピソードでもって政治の実像を再構築しようとする学問的な試みが敬遠されてきた理由も、ここにあるのであろう。

2

五十嵐仁『戦後政治の実像』はそれに挑戦する野心作である。

まず、本書のねらいについて、著者は自ら次のように述べている。

一、裏社会と密接な関わりがある戦後日本政治の真実の姿を明らかにする

二、戦後日本政治の問題点を具体的な事実に見せつけて明らかにする

三、政治こそ人間ドラマだということを示し、政治への関心を高めてもらう

続いて彼はこう言う。

「政治史とは事実の羅列ではなく事実の連鎖であり、その連鎖は人間の意図と行動の積み重ねによって形作られます」

「断片的な事実を組み合わせる新しい歴史像を提示することが歴史家の仕事だとすれば、それを私は戦後日本政治史において試みようと思った次第です」

この意欲的な挑戦に臨んで著者が手にする武器は「ほとんどが公刊されている既存の文書」であって、具体的には「政治家や官僚、企業家

などの回顧録，ジャーナリストの取材や報道，研究者の聞き取りなど」に限られている。この武器で五十嵐さんは「政治の真実の姿を明らかにする」ことができるだろうか。

すでに見てきたように，政治の分析にあたって過去の公刊文書は両刃の剣である。貴重な資料の宝庫ではあるが，なかみ次第では逆効果，まして使い方を誤るととんでもないことになる。では，既序の公刊文書をうまく使いこなして，所期の目的をかなりの部分まで達成するためにはどうすべきか。私が考える判断基準は次のようなものである。

その文書は客観性という意味で，多くの関係者からの信頼を得ているか

例えば，功なり名とげた古手の政治家の自伝類や，その派閥にべったりだった記者や関係者が書いた派閥ボス関連著作は，評価の順位が最初から低いのがふつうである。

その文書の記述を裏付ける複数の証言ないしは記述が存在するか

現実には「裏付ける」証言より「裏付けない」証言のほうが多いからおもしろい。裏付ける証言と併せて，まったく異なる証言をいくつか例示できるかがポイントである。

その文書に盛り込まれた秘話やエピソードの紹介だけでとどまっているのではなく，それを素材にした上での独自の見解が，著者によって示されているか

これがいちばん大事なことである。あまたの素材の海のなかから決定的なものを採り出し，いかに冷静に説得力ある結論を導き出すか。

3

以下，この三点を物差しにして『戦後政治の実像』を読んでみよう。

本書の巻末には，おびただしい量の引用・参考文献が掲載されている。選択にバランスがとれており，著者の目配りのよさが伝わってくる。

その意味では，使用された文書の多くは客観性を持っているし，文書の裏付けについても比較的努力が払われている。

にもかかわらず，公刊文書だけで歴史を語ることは至難の業だと思わざるを得ない。

例えば，竹下登氏が中曽根康弘氏の指名で党総裁・総理に選ばれたいきさつである。本書ではその経緯が中曽根氏の著作『天地有情』の一節，「間接税を成立させるには（竹下君が）一番の人物でした」というセリフを引用して語られている。しかし，中曽根氏のこの説明はきれいに過ぎるというのが，当時そばから事態を眺めていた私の印象である。消費税制の創設に初めて成功した竹下氏に対する中曽根氏のエクスキューズ，あるいは後知恵のたぐいではなかったか。政治家は長生きしなければ損だ，とつくづく思う。

もう一つ，本書には首相としての鈴木善幸氏がほとんど登場しない。当時，内閣記者会に属していた私は，いまでも鈴木退陣の真相を知りたいのだが，鈴木氏も語りたがらず，不透明なままだ。他の総理経験者に比べても「首相・鈴木」に関するものはごく少ない。既存の公刊文献に傾斜し過ぎると，こういう場合，肝心な部分が抜け落ちることがあるから用心しなければならない。

著者が，周囲から「派閥の一員」視されていた記者の著作を最初から排除し，良質の資料に限定しようと努めたことはよかった。なかには「（後藤田が）机をたたいて（二階堂を）怒鳴り上げた」といった一歩間違うと政治講談に落ちかねない記述の引用もあるが，これには当事者のきちんとした反論が紹介されていて，誤解のないようになっている。第一，後藤田正晴氏の真骨頂は「静かな威圧」にあり，怒鳴るといった下手な手段など無縁である。また，圧力を受けるとますます意固地になるのが二階堂氏の常

だった。いずれも政治記者ならだれもが知っていることだ。

しかし、当事者のうち一人が肯定し他が否定する事態になると、これはもう「藪の中」の世界だ。本書は田中角栄氏と創価学会がからむ「言論出版妨害事件」を取り上げているが、そこには公明党元委員長だった矢野絢也氏の著作から次の個所が引用されている。

「昭和四十四年から四十六年にかけて藤原弘達氏が創価学会批判を繰り返した時には、私と竹入（義勝氏。当時の公明党委員長）とで田中（角栄）氏に調停を頼みにいった。田中氏は『よっしゃ』と快く引き受け、赤坂の料亭に藤原氏を呼び、仲介の労をとった。結果は破談だった。我々は隣室に控えて待っていたのである」

ここでいう「我々」は当然、竹入・矢野の両氏だろう。ところが竹入氏は一貫してこれを否定している。あの日は自宅をマスコミに取り囲まれて一步も出られなかった、と言うのである。

いわゆる二階堂擁立構想についても当事者の言い分は混沌としたままだ。竹入氏が「中曽根内閣は日本のためにならん。二階堂でいこう」と言ったりして、最終的には与野党を巻き込んで展開された「あわや」の二階堂首班構想である。それがなぜ、田中角栄氏は最後に中曽根続投に転身したのか。なぜ、この構想の推進役だった鈴木善幸氏は土壇場で変身したのか。ミステリーである。

これについて著者は後藤田氏の著作を引用する。後藤田説は、田中氏はおのれの我執から「いやいや（二階堂は）だめだ」と言い、はなから二階堂氏には芽はなかったようだったというのである。しかし、その直前の田中・二階堂会談に立ち会った某有力政治家によれば、二階堂氏は出馬に終始積極的で、あの角栄氏が「キ

ミは俺に統帥権までよこせと言うのか」と声を張り上げたほどだったという。だが、最後には二階堂擁立で二人は完全に合意した、とこの政治家は証言している。

政界にはこういう例が数えきれないぐらいたくさんある。つまり、政治家や新聞記者の証言をいくら積み上げても、政治には不透視でミステリアスな部分が依然として残るということである。五十嵐さんの『戦後政治の実像』にしても同じことである。

4

だが、そのことは本書の評価をいささかも落とすものではない。肝心なのは、著書がこうした材料を使っていかなる料理を作ったか、いかなる独自の見解を示したかである。それがない限り「断片的な事実を組み合わせで新しい歴史像を提示」したい、という著者の意気込みは空回りに終わるのである。

結論を先に述べるならば、この点での五十嵐さんの意図はかなり成功している、と言っている。以下、私がそう結論づける根拠をいくつか記す。

第一は、著者がこの本の伏流水として位置づけている日本政治の「連綿たる継続性」の問題である。天皇制の藩屏の役割を果たした官僚制は戦後も温存され継続してきた。高級官僚出身の戦争犯罪人を総理にした私たち国民は、こんどはその人の考えを尊敬してやまない孫を、日本版ネオコンの有力政治家としてもてはやしている。人的に、思想的に、戦前的なものへの回帰が現実のものになろうとしているとき、連綿たる継続性に対する著者の警鐘は重要だ。

第二は、戦後日本政治とカネにまつわることである。自由党結成の資金担当＝児玉機関の暗躍。造船疑獄を指揮権発動で押さえ込んだ保守勢力。ロッキード事件でついに外国のカネにまで手を染めた総理大臣の犯罪。そういった歴史

を、人くさく、克明に追った本書は、期せずして日本のヤミの部分一本の線上につないでみせて成果をあげた。つまり、田中角栄氏の犯罪は、指揮権発動で生き延びた人びと（その何人かはその後総理大臣になるわけだが）が犯した罪と同じ延長線上にあることを明らかにした。

第三は、中曽根康弘氏のあぶり出しに - それに成功したかどうかは別にして - 著者が異常なほどの熱意を燃やしていることである。

この政治家には、早くからカネにまつわる話題がついて回った。それに、右翼の大物で政界のフィクサー・児玉誉士夫と親密な関係にあったことは周知の事実であった。しかし、その実態はほとんどが霧のなかにある。「（それが）どのようなものであったか、恐らく永久に分らないだろう。というのは（児玉は）真実を語らぬまま秘密を墓の中まで持って行ってしまったからである」と、著者も無念そうに書いている。

しかし、いったん退いたようにみせながら、五十嵐さんは終章近くになって再度、陣営を建

て直して打って出る。「戦後政治の負の遺産」の章に、わざわざ「危うく難を逃れた中曽根康弘」という一項を設け、その足跡を執念深く追求しようとしたのだ。

長寿をまっとうし、最後の瞬間まで現役政治家であろうとしている中曽根氏こそ、戦後の日本政治の光と影の両面を知り尽くし、多くの重要場面で自ら参画した人物である。ここを掘り下げないかぎり、ほんとうの戦後像を描ききることはできない。

ただ、中曽根氏は国家観から原子力行政まで自ら語るところは大であるが、不思議なことに、その政治的言動の足跡を丹念に追い、冷静に掘り下げた文献は少ない。それはなぜか。何がそうした行動をためらわせているのか。著者が本書で後人に託したかった宿題の一つはこのことだったのかもしれない。

（五十嵐仁著『戦後政治の実像——舞台裏で何が決められたか』小学館刊、2003年8月刊、335頁、定価1,800円＋税）

（ちゅうま・きよふく ジャーナリスト）

OISR.ORG

Ohara Institute for Social Research, Hosei University

OISR.ORG は法政大学大原社会問題研究所の公式サイトです。OISR は研究所の英文名 the Ohara Institute for Social Research の略文字で、URL は <http://oISR.org> です。「オイサー・オルグ」とご記憶ください。

■新デザインのオイサー・オルグ

総合案内	研究活動 刊行物	大原デジタル ライブラリー	大原デジタル アーカイブス	大原デジタル ミュージアム	大原社会労働 リンク集	英語版 English
------	-------------	------------------	------------------	------------------	----------------	----------------

大原社会問題研究所の公式サイト OISR.ORG は、2003 年 10 月 1 日より新しいデザインに移行しました。サイト内の各ページについている上のようなタブをクリックするだけで、そのページへ行くことができます。